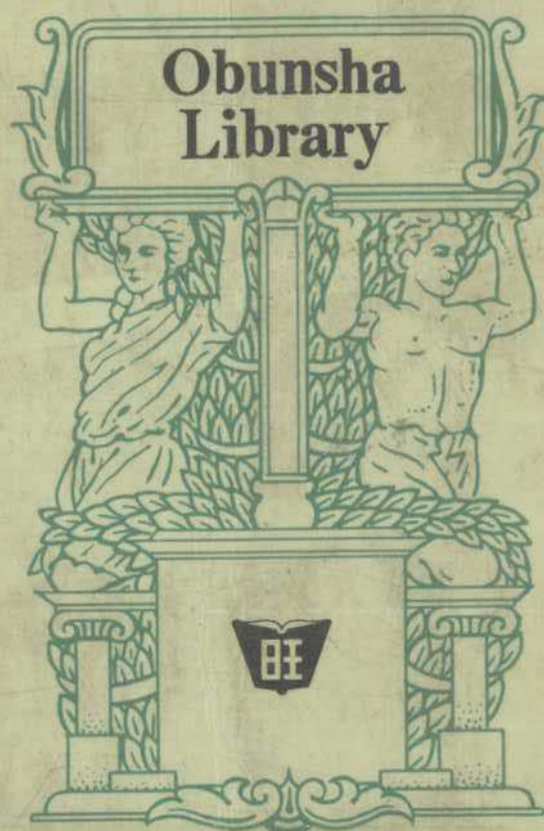




「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであろう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたって、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長

赤尾好夫

〔編集顧問〕 伊藤 整 茅 誠司 木村 毅
(五十音順) 塩田良平 中島健蔵 森戸辰男

旺文社文庫 母のない子と子のない母と 180 円
他一編

昭和42年 5月10日 初版発行
昭和45年 3月20日 重版発行
著 者 つぼ い さかえ
壺 井 栄
発行者 根 本 峰 好
印刷所 株式会社加藤文明社

(中村印刷・清水印刷・穴口製本)

旺 文 社
東京都新宿区横寺町
東京(03) 267 - 1111〔代〕

© 旺文社 1967
しに転載、複製することを禁じます

旺文社文庫

母のない子と子のない母と

(他) 坂 道

壺井 栄 著

旺文社

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

二	白いごはん	卵	二五三
三	にせチビ		二六〇
四	なんだ坂こんな坂		二六四
解 説			
人と文学		国分一太郎	二七五
『母のない子と子のない母と』の解説			二八〇
『母のない子と子のない母と』の鑑賞			二八四
『坂道』の鑑賞のため			二八九
母親の肌ざわりを読む		坪田譲治	二九一
軽井沢の壺井さん		芝木好子	二九五
代表作品解題			二九六
参考文献			三〇三
年 譜			三〇四
挿絵	村上 豊		

原文の表現をそこなわない範囲で現代表記法にもとづいて漢字を削減した。また、難解な語句や事項には、小活字で傍注を加えた。

(編集部)

母^はの^はない子と子の^はない母と

一 オリーブに吹く風

小豆島しょうどしまを知っていますか。もしも、よくわからないようでしたら、いちど、日本の地図をひろげてみてください。瀬戸内海せとないかいの東のほうに小犬のような形をした、小さな島が見つかるでしょう。その小犬は今も、うつむいてごはんを食べているような、かっこうをしています。その背中に「小豆島」と書かれてあるはずです。

まるで、あずきつぶのように小さそうな名まえではありますが、かぞえきれないほどたくさんある瀬戸内海の島々のなかで、小豆島は、淡路島あわじしまにつづく、二番めに大きな島なのです。周囲しゅうい百五十キロと言われていますから、それでだいたいの広さがわかると思いますが、もっとわかりよく言えば、この島のなかに三つの町と十三の村があります。ごく近ごろのこと（昭和二十六年の春）、いくつもの村がいっしょになってひとつの町になったりしましたが、これからはじまる物語ものがたりはそのままのことになります。

小豆島は、寒懸山かんかけやま（1）のふもとに知られていますが、もっとめずらしいことは、日本でたった一か所、オリーブみが実ることでも名高い島なのです。オリーブの木は、外国でも地中海ちゆうかいにのぞんだ、

（1）神懸川沿岸の名勝、寒霞溪かんかけいともいう。（2）小アジア・南ヨーロッパ原産の木犀科もくせいに属する常緑樹。その実の色をオリーブ色という。実から食用・薬用の油をとる。青い実を塩づけにしてもたべる。

あたたかい国にしか育たないのだそうですから、小豆島もそのようにあたたかく、たいそう景色のよい島です。けれど、冬のあいだは、島じゅう潮風にふきさらされて、オリーブのやわらかな枝もゆすぶられつづけています。その風のなかに、くるしいことや、たのしいことや、悲しいことや、うれしいことがくりかえされて、また春がくるようです。あんなにひどい海風が、じつは、小犬の島の足にあたる岬の山でやわらげられて、オリーブの育つにちょうどよい風になって吹きつけていると聞いたたら、島の子どもたちだって、きっとおどろくでしょう。

これは、オリーブ園の近くの村のお話です。戦争がおわって一年ばかりたったころのことで、どっちをむいても、おとうさんのいない家や、息子がまだ帰ってこない家がたくさんありました。戦争ちゅう、大阪や神戸あたりから疎開してきて、そのまま帰れぬ人なども、だいぶありました。これから出てくる、おとら小母さんなどもその口でしたが、なんと言っても、おとら小母さんは生まれが小豆島でしたから、故郷へ帰ったようなつもりで、すっかり村の人になっていました。若いとき、大阪へお嫁にいつて、十八年ぶりに疎開で帰ったときには、もう親もきょうだいもなくなつていて、いとこにあたる西屋という家の土蔵の階下だけをかりて、そこでひとり暮らしていました。

こういう人のなかには、ときどき、とほうもなく子どもずきの小母さんがいるものですが、おとら小母さんもそういう小母さんでした。ひとりぼっちだから、ついさびしさから子どもをよせつけ

(1)昭和二〇年八月一五日に終わった日本と連合国との戦争。太平洋戦争(大東亜戦争)。(2)戦時中、都市からいなかへうつりすんだこと。

るのかもしれませんが、でも、まだ村には、ほかにひとり暮らししている人がいますけれど、その人なんぞ、道で出あっても、子どもなんか人間でないみたいで、目もくれずに歩いていきます。おとら小母さんおはときたら、子どもの姿すがたさえ見ると、道のまんなかでも大声で名をよぶのですから、しんから子どもをすきなのだと思わずにいられません。四十ぐらいなのに、子どものように、くりくりとした丸顔で、背のちんちくりんの小母さんは、まあいい目をよけい大きく見ひらいて、いろんな昔話をしてくれたり、ほころびをぬってくれたり、バリカンであたまを刈かってくれたりするのです。ときには女の子の虱しらみがりをすることもあります。

そんな小母さんのことを、ものずきだとか、おっちょここだとか、なかにはお人よしだなどと、ちょっぴりけいべつするようには言う人もありましたが、たとえものずきでも、おっちょここでも、子どもたちにとっては、いっこうさしかえのないことでありました。おっちょここことかものずきと言うのは、きつと、子どもたちのすきなことかもしれません。おかあさんのきびしいやさしさともちがう、おばあさんのねこっかわいがりともちがう、身うちの伯母おばさんたちの、えんりえんりよなしの、むきつけ言いいともちがう、それでいて、おとら小母さんと話していると、びしびし言われてもなんだかうれしくなる、そんな小母さんなのです。ちょっとへんなのは、おとら小母さんのとこへよってくのが、おもに、男の子だということです。しかし、へんだなんて言うのは、そのほうがへんなこととで、もしも小母さんに、そのわけを聞いたなら、小母さんは、きつと言うでしょう。

(1) 女の髪の毛につくアタマジラミをとること。 (2) おっちょこちよい。ちょこちよとして考えの浅いもの。 (3) ずけずけ言うこと。

「男の子はあそびずきだからね。十歳とおになっても、ほいずにあそべるんだもの。女の子ときたら、昔から、なんじゃらんじゃらと手つだわされて、あそぶまもなしさ。かわいそうに。」

それはきつと、小母おはさんのけいけんしたことなのでしよう。しかし、そうは言っても、小母さんの心のなかには、ちつとばかりわけがありました。小母さんじしんは、このごろめったに口に出しませんでした、なくなった息子むすこの小さいときのおもかげを、子どもたちのなかにさがしていたこととです。小母さんは、じぶんが息子になりかわって、子どもたちと遊んでいたのかもしれない。小母さんのひとり息子は少年航空兵こうくうへいでありました。終戦しゅうせんのまえの年、土佐とさの後免ごめんという町の兵營へいえいにいたその息子が、キトクだという電報でんぽうをうけとって、小母さんはふだん着ぎのまま、かけつけました。しかし、いくら心はかけつけても、そのときいた大阪から土佐まで行くには三日もかかりました。汽車にのり、船にのりかえ、また汽車をなんどもりかえて、やっと後免へついたのは三日めの夜でした。

防空演習ぼうくうえんしゅうで、まっくらな後免の町を、おとら小母さんは、氣ちがいのように大声で泣きながら、二度ほど面会めんかいにきて、知っていた駅前えきまえの道を、足さぐりで歩いて、いつもゆく宿屋にたどりつきました。そこには、ほかに四、五人のおかあさんや姉ねえさんがきていて、その人たちはみな、息子や弟がキトクだという電報でやってきた人ばかりでした。小母さんの息子たちは、はじめてのった練習機しゅうぎが故障こしょうのためにつらくし、キトクの電報をうったときにはもう、みんな死んでいたのです。そのときのことを、おとら小母さんはこんなふうに言ったことがあります。

(1) 野放図、自分かつて。

(2) 今の高知県。



「——シシオー シシオー と、おとらが一生一度の声でよんでみたけれど、シシオは鼻血はなぢも出さなんだ。タイガーがライオンを呼ばわったのさ。」⁽¹⁾

ふざけたような言いかたをしましたたが、おとら小母おぼさんの目のなかはきらきら光りだし、涙なみだがもりあがっていました。小母さんの息子むすこの名は、なんとめずらしい獅子雄ししおという名まえでした。これとて、わけがあるのです。おとら小母さんが生まれたときにさかのぼらねばなりません。四十年もまえのことです。村の中ちゆうびやくしやう百姓ひやくしやうの家に、月たらずの、あわれそうな女の子が生まれました。四人めにはじめて女の子なので、一家は大よろこびでしたが、いかにもひよわな赤ん坊を見ると、この子がぶじに育つかと、そのおかあさんは心をいためました。するとおとうさんが、おかあさんをなぐさめて言いました。

「おとらとか、おくまとかいう名にすると、たっしやに育つというでないか。この子もおとらか、おくまとつけようでないか。」

そこで、おとら小母さんの名まえがきまりました。小豆島しょうじまに、はじめて植えたオリーブの木が育ちだしたところのことです。そのおとらさんもぶじに育ち、年ごろになり、そして大阪おおさかの薬屋くすりやへお嫁よめにいき、そして子どもが生まれました。母親はは似にとでもいうわけなのか、せっかくの男の子が、月たらずでもないのに、ふつうよりもずっとずっと小さかったのです。おとら小母さんは、おとら小母さんのおかあさんと同じように案じあん、子どものおとうさんに相談そうだんしました。

(1) おばさんの名の「タイガーとら」と、むすこの名の「ライオン獅子雄」をこういう言いかたにしている。
 (2) 中農、多くは農夫をやとつて、田畑一〇ヘクタール前後を耕作する。

「丈夫^{じやうぶ}に育つように、虎雄^{とらお}か熊雄^{くまお}とつけましようよ。女の子のトラやクマは少しはずかしいけれど、男の子は元気そうでいいから。」

じぶんが、ときどき、はずかしい思いをしたことを心に浮かべながら、若いおかあさんのおとらさんが言うと、薬剤師^{やくざいし}のおとうさんは、ちょっとばかりへそをまげて、

「そんな人まねするくらいなら、いっそのこと獅子雄^{ししお}としよう。」

こんなわけで、おとらといい、獅子雄^{ししお}といい、ぶじに育ち、しあわせに暮らすようにとねがう親ごころからつけた名まえでしたが、戦争^{せんそう}は人間のやさしい思いやりなどに、少しもとんじやくしないで、たくさんの若いいのちをうばい、たくさんのおかあさんや子どもたちを泣かせました。おとら小母^{おば}さんなど、息子^{むすこ}ばかりか、大阪^{おおさか}の空襲^{くうしゅう}では、つれあいの小父^{おじ}さんまで失ってしまったのです。まだそれほど年でもないのに、小母さんの白髪^{しらが}が急にふえたのはそれからです。

それいらい小母さんは、ずっと小豆島^{しやうとしま}に腰^{こし}をすえています。生まれ故郷^{こきやう}ですもの、もう小母さんはどこへもいく気はないでしょう。もしかしたら、なくなった小父さんや息子のことを思いだすのが悲しくて、小母さんは大阪^{おおい}へいかないかもしれません。ま四角な、壁^{かべ}ばかり多い土蔵^{どぞう}のなかで、小母さんはミシンの内職^{ないしやく}をしたり、大阪からとりよせた薬を売ったりしながら暮らしています。たが、子どものこないときなど、小母さんは、まるで、風のなかから何かの音を聞きだそうとでもするように、じいっとして考えこんでいることもありました。でも、そんな顔を知っているのは、土蔵のなかの壁ばかりです。

二 風 の 子

二八月は風の季節きせつです。ことに二月の風は、ぼんやりしてると吹きとばされるほど、もうれつでした。ピュウ と、笛ふえをふくような音をたてて、いちにち北風が、電線をゆすぶりつづけています。風のしずかな日でも、じっとしていれば、首のまわりや袖口そでぐちや、ズボンのすそを目がけて、刃は物のものようないたさで、しのびこんできます。それをはらいのけるには、かけだすことがいっとうです。ぼんやりなどしていられません。

子どもは 風の子

じじ ばば 火の子

どなっているのか、歌っているのか、とにかくそれで、冬の風とたたかっているのです。海から吹きあげ、山から吹きおろす風と風は、もみあって、うずをまいて、なにもかも、もみくしゃにするのです。そのつむじ風を、まいまい風と、子どもたちは言いました。木の葉も紙くずも、浜はまの砂までも吹きあげ、吹きとばすまいまい風に、いきをつめ、目を細めながら、子どもたちは前こごみになって走りまわりました。

子どもは 風の子ッ

じじ ばば 火の子ッ

それは元気な子どもたちの相言葉^{あいことば}です。寒がりの弱虫を笑うときにも、これを歌います。人に歌われるとき、それははずかしめの歌であり、じぶんで歌えば、じぶんをきたえる冬の歌です。

「はい はい 火の子かよッ。」

かぎやのひとり息子^{むすこ}である史郎^{しろう}は、学校から帰るなり、おばあさんのこたつ部屋^{べや}にもぐりこんで、たぬき寝入りをしているところを見つかり、ゆすぶられました。ひるま、こたつにはいると、かぜをひくからといって、雨ふりでもないかぎり、ゆるされないことになっていたのを、だれもないのをいいことにして、ぬくぬくと、もぐりこんだばかりだったのです。火の子かと言われてぬけ出したものの、あてつけに猫^{ねこ}のホーをも、いっしょに引っぱりだし、どすんと畳^{たたみ}の上にほうりなげておいて、部屋を出ながら、

「猫のほうが、ぼくより、かわいいのかよッ。」

と、にくまれ口を言って外へとび出しました。まだぬくもらなかったとはいえ、こたつ部屋から、まいまい風のなかに出てみると、寒さはいちだんと身にしみました。

「子どもは 風の子！」

やけな大声を出して、じっと耳をすましましたが、それにこたえる声はなく、史郎じしんもま